安倍三代

写真と標題は、ジャーナリスト青木理の注目の書。序章から。

安倍晋三も確かに祖父・岸信介への敬愛を隠そうとしていない。むしろ各種のインタビューや著書などではたびたび岸の名に言及し、影響を受けていることを積極的に示唆してきた。猛烈な反対運動を押し切って日米安保条約を改定に導き、憲法改正に終生執念を燃やしつづけた岸の姿に自らを重ね合わせている節すらある。

他方、父方の祖父の名が安倍の口から語られることは極度に少ない。その祖父－安倍寛について、安倍は国会審議の場で、わずかに次のように述べたと国会議事録に記録が残されている。

「私の父方の祖父は安倍寛といいまして、翼賛選挙にいわば反対をして、翼賛会ではなく非翼賛会として当選した数少ない議員でもございましたし、反東条政権を貫いた議員でありました」

そう、当然ながら安倍は知っている。自身と父・晋太郎の〝男系ルーツ〟である安倍寛も政治家であり、相当に筋金入りの反骨者だったことを。また寛は、筋道や道理を外した権力の専横に全力で抗う反権力者であり、政治思想的にも、政治手法の面でも、政治的な立ち居振る舞いの面でも、現政権とはおそらく真逆の地平に立っていた。

だから安倍は寛のことを語ろうとしないのではないか―というのは、私の勝手な妄想にすぎない。しかし、まさにだからこそ、語られざる祖父・寛の実像を私は追跡してみたいと思った。先の大戦下、無謀な戦争に突き進んだ軍部と軍部出身の政権に公然と抗い、政界に打って出た寛。その息子であり、首相まであと一歩というところで病に倒れた晋太郎は、父・寛を終生誇りにしていたという。なのに戦後70年の時を経た現在、宰相の座に就いて長期政権を成し遂げつつある孫の晋三は、寛についてほとんど語ろうとしない。

（晋三と岸信介が並んだ写真は、朝日新聞2014年5月3日朝刊）

その「安倍三代」の軌跡を追うことは、現政権のありようと問題点を根本的に問い返すのと同時に、日本政治が現在の地平－それを劣化していると捉えるか否かも議論のあるところにせよ―に至った歴史的な鳥瞰図を描くことにつながるとも考えている。

（2017年7月4日）